2024(令和6)年1月16日

立憲民政党の政治的遺産
―『立憲民政党全史』の刊行に寄せて―

学習院大学法学部
井上寿一

はじめに

この度、櫻田會設立90周年記念事業の一つとして、『立憲民政党全史』を講談社から出版することになりました。来月（2024年2月）には書店に並びます。この『立憲民政党全史』の刊行に寄せて、立憲民政党の政治的遺産と題して、お話しさせていただきます。

Ⅰ　刊行の経緯

本書には3つの序文が付されています。櫻田會設立50周年事業として、「総史立憲民政党」が2分冊として刊行されました。その時の執筆者のおひとりの中邨章先生のご意向もあり、本書が『総史立憲民政党』の志を継ぐことの証として、同書の小楠正雄理事長（当時）の「序」を巻末にそのまま転載しました。

Ⅱ　今なぜ立憲民政党の歴史を振り返るのか？

それでは本書をとおして、今なぜ立憲民政党の歴史を振り返ろうとしているのでしょうか。3つ理由があります。

1つは立憲民政党が新党だったからです。1993年に1955年体制が崩壊したはずです。ところが今「ネオ1955年体制」が論じられるようになっています。野党の支持率はいずれも一桁パーセント台にとどまり、旧体制への回帰が顕著です。他方で各種の世論調査が示すところによれば、国民は政権交代を期待しています。このような現在の政治状況のなかで、反立憲政友会の新党として結成された立憲民政党の歴史は、野党が政権交代に向けて、どのような理念と政策を必要とするのかを示唆しているのです。

2つは立憲民政党が戦前昭和の二大政党の一翼を担ったからです。政権交代とそれに続く政党政治システムの再構築を構想するには、戦後の保守対革新よりも戦前の立憲民政党対立憲政友会の枠組みを参照する方が役に立つのです。

3つは政党間提携の重要性の観点です。政党政治システムの再構築には政党間連携の再編が欠かせません。戦前昭和においては政党内閣の崩壊後も政党間連携を模索しながら、政党内閣の復活が志向されました。そうだとすれば立憲民政党の歴史は振り返るに値するでしょう。

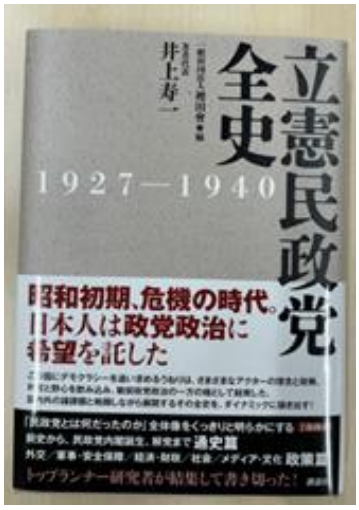
Ⅲ　『立憲民政党全史』の構成

それではつぎに本書『立憲民政党全史』の構成を説明いたします。本書は2部構成です。第一部と第二部を縦糸と横糸として織り成す立憲民政党の全体像を提示しています。

第一部＝通史篇は5つの章によって構成されています。第一章は、1927(昭和2)年の結党時にさかのぼって、近代日本の政党政治史のなかに立憲民政党を位置づけています。第二章は、最初の立憲民政党内閣＝浜口雄幸内閣を扱います。立憲民政党の「日常」(1 年間の日

程）は時間の政治学の観点から多くの知見を提供しています。浜口の政治改革、政党改革への情熱を知っていただきたいと思います。第三章は、若槻礼次郎の人物像を活写しています。組織の政治力学との交錯において、国内外の器機に直面した若槻内閣の軌跡をたどるのが本省の目的です。第四章は、多様な政党間連携と新党構想によって、政党内閣の復活をめざす立憲民政党を描いています。第五章は、大政翼賛会の成立に至る過程で、回答を余儀なくされる民政党の悪戦苦闘を再現しています。まっさきに解党したのが社会大衆党だったのに対して、立憲民政党は解党がもっとも遅れました。

第二部＝政策篇も 5 つの章によって構成されています。第六章は立憲民政党の外交が協調外交だっただけではなく、新党＝立憲民政党にふさわしい外交理念を持つ「革新」外交だったことを明らかにしています。第七章は、立憲民政党の制度・組織・人事の観点からなぜ民政党は軍部をコントロールできなかったかを分析しています。第八章は、立憲民政党＝「緊縮（消極）財政」との通説的な理解に対して、経済・財政政策をめぐる二つの潮流の対立と相互補完関係の力学の分析視角から新しい解釈を展開しています。第九章は、今日の社会問題と通底する社会的な格差の是正の問題に対して、立憲民政党がどのように取り組んだのかを考察しています。第十章は、従来ほとんど言及されてこなかった最先端の研究分野である立憲民政党のメディア・文化政策の考察が主題です。本章は、大衆社会状況のなかでの浜口内買うのメディア・文化政策の画期性を指摘しています。

Ⅳ　国民の知的共有財産

今年（2024 年）は世界的な選挙の年です。台湾、韓国、ロシア、インド、そしてアメリカの大統領選挙と続きます。民主主義のゆくえはどうなるのでしょうか。他方で今年は先進民主主義国としての見本の真価が問われる年でもあります。ウクライナ戦争とガザ紛争が続くなか、「台湾有事」のリスクや北朝鮮の核・ミサイル問題があります。このような国際情勢のなかで、「自由・民主主義・基本的人権・法の支配・市場経済」、このような普遍的価値を重視する価値観外交の真価も問われることになります。このような価値観外交の国内基盤が政党政治です。日本は非西欧世界において、他国よりも一歩さきに政党政治を始めました。立憲民政党はその近代日本の政党政治において重要な役割を果たしました。その立憲民政党の歴史が国民の知的共有財産となって、日本の政党政治がさらに発展していくことを願いながら、私からのお話を終わらせていただきます。